

【言葉】の改善から生活への希望を見出した症例

利用者情報 50歳代 女性 病名：左被殻出血（運動麻痺、失語症）

経緯

発症前：仕事をしながら夫・娘2人・息子1人との5人家族。家事は主に自身で行っていた。
退院後：言葉の出にくさ、言い間違い、聞き取り困難を自覚。電話やメールもできず精神的に落ち込んでいた。家事は夫・娘が行い、自身の生活動作にも介助を要する状態。

目標

コミュニケーションの円滑化、趣味や娯楽を用いて精神面の機能向上。

介入初期

自分の話したい内容を言語として表現するための練習を実施。
条件に当てはまる単語を話す・書くなどで伝える語想起。
初期の結果は、「ぬ」から始まる単語が7個
「あ」から始まる単語が10個

書字の語想起練習の実際の写真▶

ぬ から はじまる言葉 10個

ぬんちく	ぬう
ぬいぐるみ	ぬか
ぬた	ぬらりひん
ぬう	
ぬりえ	

介入中期

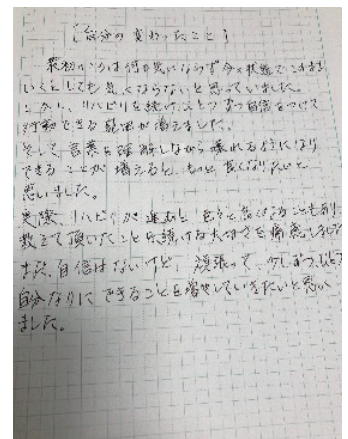
会話は短文でゆっくりであれば可能。
外出時の会話や電話でのコミュニケーションも徐々に可能に！
ポジティブな発言が増加し、外出機会も増加。
語想起の結果、「ぬ」から始まる単語が10個
「あ」から始まる単語が14個

ぬ から はじまる言葉 10個

ぬりえ	ぬかた
ぬいぐるみ	ぬいぐるみ
ぬんちく	ぬま
ぬかど	ぬた
ぬの	ぬらりひん

現在

簡単なコミュニケーションは円滑に可能になり、自身の気持ちを表現できるようになった。キーボードやウクレレなどの楽器演奏を趣味として行っている。生活の中で笑顔が増加。



【まとめ】

言語訓練の一環で行っていた歌唱訓練をきっかけに現在は楽器演奏を趣味にしている。言語機能の改善に伴い、家族との会話も増加している。
退院直後は、何もできない喪失感が強かった利用者だが、現在は「自分なりに精一杯頑張る」の精神で次の目標に向けて目下努力を継続されている。リハビリでも QOL の向上を目的に生活のサポートを継続する。

在宅での言語聴覚訓練の様子と成果

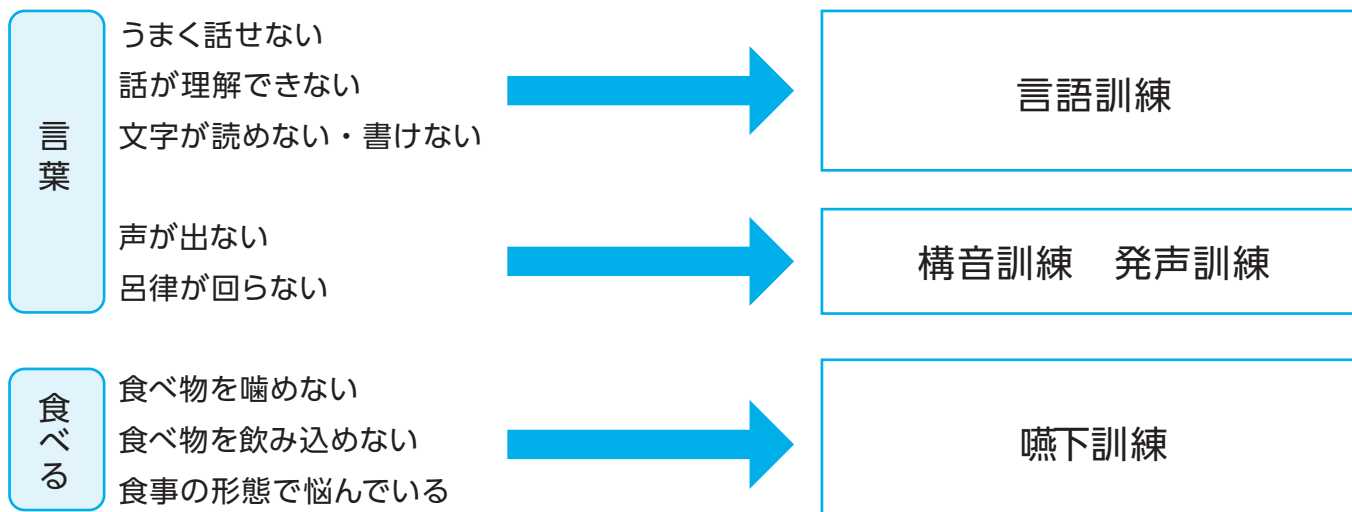
訪問看護ステーション城東

言語聴覚士 (ST) は・・・

言語機能と摂食機能 (食べる・飲み込む)、聴覚機能、高次脳の維持・改善を目的にリハビリを行う対象となる活動は「言葉」「食べる」「聞く」「理解する・考える」となります。



【言語聴覚士の主なリハビリ内容】



「言葉を発する」「聞いた内容を理解する」「見たものを理解する」など、言語に関わる機能は多岐に渡ります。言語聴覚士は、様々な評価方法を用いて問題がどこにあるのか、どの機能に障害があるのかを判断し、適切な言語訓練を提供することができます。

